

将来の有望選手

～世界に羽ばたけ～ 滋賀のアスリートたち



深尾俐瑠紀

Fukao Riruki

滋賀ジュニアフェンシングクラブ 所属

2006年9月18日、栗東市生まれ。葉山中学校2年生。幼少から運動が好きで、空手や陸上を経験。全国小学生陸上競技交流大会地方大会で、4年生時と5年生時に100m走1位、6年生時には80mハードルで2位に。中学では顧問の先生に勧められ、棒高跳びにも挑戦し始めた。レイキッズに選ばれたことがきっかけでフェンシング競技と出会った。



もともと陸上競技の有望選手だった深尾選手。「他にもいろいろ経験して、自分に合うスポーツを知りたい」という想いから、滋賀レイキッズ(※)に応募し、4期生として選抜された。フェンシングを本格的に始めてまだ2年ほどだが、陸上で鍛えられたスピードと脚の筋力、空手で培った瞬発力や強い体幹などが強みになっている。また同時に、学校の部活動で陸上競技を続けており、棒高跳びに手応えを感じるようになった。2つの競技に取り組んでいるが「陸上の練習をしていると、前日のフェンシングのトレーニングが効いているなあと感じることがあります。逆に、陸上の筋トレや走るスピードを掴んだ時の感覚が、フェンシングに活かされていると思うこともあります」と、相互にいい影響をもたらしているようだ。

陸上では「全中標準記録を突破して、全中大会に出場、上位入賞」を目標としている。しかしフェンシングでの具体的な目標は立てにくい。対面競技だけに、競技力向上には試合という実践の場が欠かせないのだが、昨年は大会がほぼ中止に。自身がフェンシング選手としてのどのくらい上達しているのか、見極めにくい状況と言える。それでも「全国で戦える実力を身につけたい」と意欲旺盛だ。

フェンシングクラブの練習では、コーチからマンツーマン指導を受けた後、機械を使った実践的な“ファイティング”がおこなわれる。試合のような形式だが「勝ちを意識するより、教わったことを体に覚えさせようと考えています」と深尾選手。そうした冷静な視点も大きな武器になることは間違いない。一方、表立っては見せないが「負けず嫌い」なのだそう。前腕の筋力や握力の強化、剣さばきの練習などは家で欠かさなかったのに、遠征での実践練習の際、思うような動きができなかった。その悔しさは今後、大きくするぞい踏み出しへの原動力になるだろう。

最後に、目指す選手像を尋ねてみた。「スピードがありながら、しっかり技を扱える選手です。目標は太田雄貴さん。過去の試合を観て、スピードとキレのあるアタックがすごいと思いました。また、日本でフェンシングを有名にした方でもあります。自分も滋賀から世界に羽ばたき、活躍できる選手になれるよう、努力と挑戦を続けたいです」陸上では、桐生選手、我孫子選手が目標だそう。将来的には、両方の競技で世界を目指したいと話してくれた深尾選手。大舞台での活躍に期待がかかる。



田部井崇博さん
Tabei Takahiro

師匠が語る

滋賀県フェンシング協会
ジュニアコーチ
田部井崇博さん

すでに筋力も瞬発力も脚力も備わっていたので、初めて会った時から「このまま練習していけば必ず上達する」という印象を受けました。今ではフェンシングに必要な技術面はかなり向上しています。あとは試合の経験を重ねて、相手との駆け引きなど戦略的な部分を体得して行ってほしいですね。まずは2025年の滋賀国スポで県の主力となり、いずれは日本代表選手として大いに活躍してくれることを期待しています。

(※)滋賀レイキッズ…滋賀県の次世代アスリート発掘育成プロジェクト